

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 6 月 17 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K02651

研究課題名(和文)周氏兄弟と『新青年』グループ

研究課題名(英文)Zhou brothers and the magazine of New youth

研究代表者

小川 利康 (OGAWA, Toshiyasu)

早稲田大学・商学大学院・教授

研究者番号：70233418

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、周氏兄弟と雑誌『新青年』グループとの関係を新資料で検証し、五四時期に文学的出発を遂げた周氏兄弟の原点解明を目指した。2017年度は、長堀祐造を中心に『陳独秀文集』(東洋文庫3巻)の翻訳を完遂し、10月には「東亜中文文学国際学会議」で陳独秀セッションを開催。2018年度は早稲田大学で内外の研究者26名の参加を得て、世界初「第1回周作人国際学術シンポジウム」を開催した。2019年2月に『叛徒と隠士 周作人の1920年代』(小川利康著、平凡社)を刊行した。2019年度は3年間の研究の総括として、『周作人国際学術シンポジウム特集号』(『文化論集』第55号早大商学同攻会)を刊行した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

中国の五・四運動は、日本の中国に対する政治的、経済的侵略に対する反発から勃発したものだが、同時に新たな文化を生み出す原動力ともなった。その中心を担った魯迅と周作人は日本文学から受けた薫陶のもとで中国近現代文学も父となった。同じく日本で学んだ陳独秀はいち早く『青年雑誌』(のち『新青年』)を創刊し、中国に近代思想をもたらし、北京大学文科長として学界から旧弊を一掃した。本研究は新発見の資料によって彼らが五・四時期に果たした役割に新たな光を当てるものである。

研究成果の概要(英文)：This study attempts to clarify the relationship between the Zhou Brothers and the "New Youth" magazine through newly discovered data, in order to clarify the Zhou Brothers' thinking based on the May Fourth period. In fiscal 2017, we completed the translation of "the Collected Works of Chen Duxiu" (Toyo Bunko, 3 vol.), it is mainly by Professor Yuzo Nagahori, and held a session of "Chen Duxiu" at the "East Asia International Conference on Chinese Literature" in October. In FY2018, the world's first "1st International Symposium on Zhou zuoren" was held at Waseda University with the participation of 26 researchers from Japan and abroad. In February 2019, I published "Rebels and recluse The 1920s of Zhou Zuoren" (Toshiyasu Ogawa, Heibonsha). In 2019, We published "International Symposium on Zhou Zuoren: Special Issue" ("Cultural Studies", No. 55, Waseda University, Faculty of Commerce) as a summary of 3 years of research.

研究分野：中国現代文学

キーワード：魯迅 周作人 新青年 陳独秀

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

周氏兄弟、魯迅(1881-1936)と周作人(1885-1967)は、血を分けた実の兄弟である。四歳年長の兄魯迅の本名は周樹人であり、ともに浙江省紹興で生を享けた。二人の散文について、かつて郁達夫が「二人の経歴はまったく同じなのに、彼らの文章傾向は何と違うことか」(『新文学大系・散文二集』導言 1935年)と指摘したように、その対照的な文体はつとに指摘される場所である。しかし、その対照的な文体は決して二人の資質の親和性を否定するものではない。むしろ松枝茂夫が「魯迅を裏返しすれば周作人だ」(「好きな作家、好きでない作家」1941年)と指摘する通り、血脈ゆえの、かつ血脈を越えた親和性が潜んでいる。

二人の親和性を裏打ちしているのは、幼少期の伝統的古典教育に加え、西洋の学問を学んだ南京修学時代、そして日本留学という共通項である。日本で魯迅はドイツ語、周作人は英語で欧州の文芸思潮に触れると同時に日本文学に親しんだ。その一方で二人は失われた漢族文化の復興のため、国学大師・章炳麟の東京の私塾で文字学を修め、擬古文で欧州文学作品を翻訳した『域外小説集』(1909年)は兄弟の努力の結晶といえる。留学期間は魯迅が7年、周作人は5年にも及び、南京時代も含めれば10年前後にわたり、ほぼ同じ経歴を辿って成長した二人の間には、単なる兄弟以上に深く通底する共通の思考回路が形成されたことは疑いをいれない。

日本留学から帰国後、兄弟で最も成果をあげたのは五四時期であった。周作人が1917年に北京大学教授となると、銭玄同からの勧めで二人は相次いで『新青年』に寄稿し、運営メンバーとして参画した。陳独秀は魯迅の小説を高く評価し、自ら提唱した文学革命を擁護するものとして周作人の文学評論も掲載した。帰国後長らく停滞状態にあった二人の文学活動に新たな活躍の場を与えたのは陳独秀にほかならない。以来、1923年の兄弟訣別前までに二人は創作だけでなく、翻訳においても稔り豊かな成果をあげ、生涯にわたる文学活動の基礎を築いた。

魯迅研究は膨大な蓄積があるものの、周作人との比較論は多くなく、木山英雄「実力と文章の関係、その他」(1966年)をはじめ、概ね両者の文体比較論である。研究代表者小川利麿は「周兄弟の思想的時差」(2013年)など周氏兄弟の文学作品から両者の思想性を検討した論文を数編発表した。そのなかで日本の文芸思潮の影響として、同一作家から同時期に両者共通の影響を受容した有島武郎の例や、異なる時期に異質の影響を受容した厨川白村の例を示した。研究分担者長堀祐造は「魯迅『狂人日記』材源考」(2013年)で、周氏兄弟が『狂人日記』の材源としてソログープ『小悪魔』を参照していたことを『周作人日記』によって裏づけていた。

本研究の申請当時、日記・書簡資料の校訂整理が進み、『銭玄同日記(排印本)』(2014年)の刊行、胡適らに宛てた陳独秀書簡十三通(『中国人民大学学報』2012年第1期)の公開と新資料が次々出来していた。日本では研究分担者長堀祐造を中心として『陳独秀文集』(全3巻、平凡社東洋文庫)が刊行され、従来の研究上の空白を埋める役割を果たした。また、同人による日本初の概説的人物評伝『世界史リブレット・人・陳独秀—反骨の志士、近代中国の先導者』(山川出版社、2015年)も刊行され、東京新聞編集委員による取材記事(同紙2016年10月1日朝刊)も出て、中国現代文学の原点たる『新青年』への関心は高まっていた。如上の研究状況を背景として、研究を開始した。

2. 研究の目的

本研究では、周作人が初めて『新青年』に寄稿する1917年を起点とし、下限は1923年

頃までを研究対象とした。周氏兄弟は 1921 年夏頃を最後に『新青年』へ寄稿しなくなるが、陳独秀に反発して胡適が創刊した『努力週報』に周作人は 1922 年秋にも寄稿しており、『新青年』グループ内部で形成された人間関係はまだ継続している。この関係が最終的に消滅するのは、周氏兄弟が不和によって訣別する 1923 年夏頃とみられ、五四新文化運動とその退潮期に概ね一致する。本研究では、この時期における周氏兄弟と『新青年』運営グループとの諸関係および周氏兄弟が『新青年』、『毎週評論』を主たる舞台として展開した文学活動の内容と意味の解明を研究課題とした。

第一の課題は、周氏兄弟と陳独秀との関係の再検討であった。研究分担者長堀祐造は著書『陳独秀』及び『陳独秀文集』の翻訳を通じて、『新青年』主編・陳独秀と周氏兄弟との関係の重要性を改めて浮き彫りにした。魯迅が『新青年』に初めて発表した小説「狂人日記」を評価し、周作人が提唱した人道主義的文学論「人的文学」の価値を最初に認めたのは陳独秀であり、その関係の重要性、親密度は 1920 年に『新青年』運営方針の違いをめぐる陳独秀と胡適らが決定的対立を迎える時期まで変わらない。だが、『新青年』で展開された陳独秀と周作人の文学理念は必ずしも一致せず、「新青年宣言」(1919 年)で陳独秀みずから認めるとおり、運営メンバーは共通理念を当初から共有していたわけではない。陳独秀が 1921 年に周氏兄弟宛書簡で継続して寄稿するよう要請しても応じなかったのは感情的反目ではなく、思想的に相容れなかったためだ。『新青年』掲載の論文や「随感録」での論争を分析し、周氏兄弟と陳独秀との思想的差異を明らかにすることを目指した。

第二の課題は、周氏兄弟と錢玄同との関係の解明であった。魯迅が錢玄同の誘いに応じて小説を執筆したという挿話自体、既に神話化しているが、錢自身に即した研究は多くない。近年『錢玄同日記』(排印本、北京大学出版社 2014 年)が刊行され、劉思源編『錢玄同文集』(人民大学出版社 1999 年)と併せて基礎資料がようやく出揃ったといえる。ほぼ生涯にわたり書き継がれた日記を精査すれば、周氏兄弟との交流を日本留学時代から迎れるので、新たな事実を発掘できるのではないかと考えた。五四時期前後まで錢は魯迅と周作人ともに関係が良好で、思想感情とも最も近く、様々な場面で錢が周氏兄弟の意見を敷衍ないし代弁している。文字改革を中心とする『新青年』での錢の言説を整理し、周氏兄弟との思想的差異を明らかにすることを目指した。

第三の課題は、周氏兄弟と胡適との関係の解明であった。周氏兄弟は『現代小説叢』(1922 年)、『現代日本小説集』(1923 年)を商務印書館から刊行している。前者には末弟周建人も加わり、三人兄弟による最初で最後の合作となった。この出版を仲介したのが胡適である。そのうえ、周建人は胡適の推薦で商務印書館編訳所に就職し、周作人も胡適の推薦で 1922 年春から 30 年夏まで燕京大学国文系で新文学担当の兼任教授を務めている。『胡適日記』(1922 年 3 月 4 日)によれば、北京大学で不遇だった周作人への同情があったというが、一連の人事には『新青年』グループ分裂後に胡適が周氏兄弟への接近を図る意図が看取される。その後国故整理運動(1923 年～)に対する見解で胡適は周氏兄弟とは疎遠となり、そこに至る胡適と兄弟との関係を人事関係、思想性両面から解明することを目指した。

第四の課題は周氏兄弟二人の間関係の解明であった。五四時期は周氏兄弟が母親妻子を一堂に迎え、最も親密に過ごす最後に訣別という形で破綻する時期である。その原因を日本人妻による家庭不和に求める説があるが、最大の原因は、日本留学期に庇護者と被庇護者だった兄弟関係が五四時期に大きく変容した点に求めるべきで、そこには周作人の婚姻だけでなく、思想的分岐も関係していたと考えられる。本研究では、『新青年』における文学活動から二人の思想的な分岐がどこにあるのかを解明することを目指した。

本研究の学術的な特色は、新資料の綿密な調査に基づく『新青年』参画メンバーの関係解明にある。『新青年』メンバー間の共鳴・対立関係の解明によって、周氏兄弟が『新青年』で果たした役割を明らかにし、その思想的方向性の違いを明らかにしようとするものであった。本研究によって、従来は孤立して行われてきた個別作家研究の限界を超越し、五四時期に相互に影響を与えあいながら文学的成長を遂げていった鲁迅、周作人を中心とする作家群像を描き出すことが出来たと確信する。

3. 研究の方法

本研究は3年計画とし、以下の方法で進めたが、最終年度に企画していた国際シンポジウムを予定より1年早く繰り上げて実施した。予算面で見込みどおりにゆかない部分が多かったが、中国出張による文献調査と日本国内での国際シンポジウム開催を組み合わせた研究活動によって稔りある人的交流も実現し、研究手法としては成功であったと考える。

当初の計画としては、初年度に「問題と主義」論争を経て、『新青年』グループが分裂する1920年までを中心に関係者の日記・書簡の校合調査を行い、『新青年』運営の実態を明らかにし、現地でも文献調査を行うこととした。この計画はおおむね『陳独秀文集』全三巻の翻訳作業を通じて遂行することが出来た。また、同書の刊行を記念するシンポジウムを内外で開催した。〔「4.研究成果」参照、ならびに「5.主な発表論文等」長堀祐造(6)(7)(8)参照〕。2年目は、中国における現地調査を中心に広く文献渉猟を行い、その調査結果を踏まえた報告を行う場として『周作人日記』に関する公開シンポジウムを開催することを計画したが、基礎資料の再検討を目指した「第1回周作人国際学術シンポジウム」(詳細下記)において企図した内容は実現できた。3年目は、最終的な研究成果を公表し、国際的研究交流を図るため、中国から研究者を2名程度、日本側からは10名程度招請して、「周氏兄弟と『新青年』」をテーマとする国際シンポジウムを開催することとしたが、研究経費の不足からこれは実現できなかったものの、『周作人国際学術シンポジウム特集号』(「4.研究成果」参照)を刊行することができ、五・四時期を中心とする周作人の文学活動を論じた『叛徒と隠士』(「5.主な発表論文等」参照)を公刊できたので、3年間の研究を総括できたと考える。

4. 研究成果

1年目(2017年度)、3巻本の『陳独秀文集』刊行後、その完結を記念するため、長堀祐造は内外でその成果を発表した。国内では「シンポジウム 民国史の中の陳独秀」(民国史論の会2017年9月30日、東京・六本木、国際文化会館)で口頭発表を行い、国際的には「東アジア中文文学国際学術シンポジウム」(名古屋大学2017年10月28-29日)で中国語による論文発表を行った。後者のシンポジウムは隔年で香港、台湾、韓国、日本などで開催しているもので、各国を代表する中国語文化圏の文学研究者が集まる学会であり、近代文学の起点となった陳独秀の話題に大きな反響を呼んだ。長堀はこのほかにも下記の通り(「5.主な発表論文等」参照)、多数のシンポジウムに招かれて講演を行い、文学革命だけでなく、中国共産党創設者として、トロツキストとして、様々な角度からの議論を行い、注目を集めた。これまで陳独秀に関しては信頼できる翻訳が少なかったが、今回の翻訳を通じた研究によって、歴史、思想、文学などさまざまな分野からの学際的研究が可能になるだろう。

小川利康は、周作人が「新しき村」運動に対する関心のあり方を再検討し、周作人日記や書簡を改めて読み直すことを通じて、日本留学時代からの白樺派への関心とは異なる要因が介在していることを証明し、それがロシア革命であったことを武漢大学で開催された国際シンポジウムで発表した。また、北京第二外国語大学では周作人の言語観念を分析するた

め、1920年代の白話詩から1930年代の文言詩（雑詩）までの変遷を論じた論文を発表した。このほか、北京中国現代文学館に出張し、周吉宜氏所蔵の故安藤更生（美術史、早大教授）が周作人宛に送った書簡を閲覧および撮影を行った。周作人が安藤更生宛てに書き送った書簡は現在ご遺族のご厚意により会津八一記念館に収蔵されている。この撮影調査にあたっては徳泉さち氏（当時会津八一記念館助手）から多大なる協力を得た。

2年目の2018年度、早稲田大学において「第1回周作人国際学術シンポジウム」（7月7日、8日、会議言語：中国語）を開催した。内外から参加した研究者26名が論文を発表し、成功裡に閉幕した。中国国内では、周作人に関する学術会議の開催が許されない政治状況にあるため、周作人昔遊の地である東京で開催したことに対する社会的関心も高く、当日の会議の様相については、『読売新聞』（2018年7月14日夕刊）、『朝日新聞』（2018年8月25日朝刊）で報道された。今回のシンポジウムに対する学術的評価についても、顕著なものであったといえる。シンポジウムで発表された論文は、中国を代表する学術研究誌『現代中文学刊』（2018年6期）、『魯迅研究月刊』（2018年10期）、『新文学史料』（2019年1期）に掲載された。一つの会議で発表された論文が複数の学術誌に掲載されたのも異例なら、『魯迅研究月刊』、『新文学史料』の2誌がそれぞれシンポジウムを詳報したのも異例である。ここからもシンポジウムに参加した研究者の学術水準の高さがうかがわれる。この会議の主題は『新青年』メンバーや周氏兄弟に限定するものではなかったが、大部分の研究は周作人だけでなく、魯迅、陳独秀、錢玄同らに係わるもので、関係する研究者を一堂に集めて討論が出来たことは大きな収穫であった。上記のほか、韓国の現代中国文学研究者を招き、東京大学（駒場キャンパス）において、東京大学教授伊藤徳也氏が主催する「日韓現代中国文学ワークショップ」（2018年12月22日、23日）に共催者として参加した。ここでの韓国研究者との討議と交流も極めて有益なものであった。そして、2019年2月には小川のこれまでの研究を集大成した『叛徒と隠士 周作人の1920年代』（平凡社）を刊行した。

3年目の2019年度は、3年間の研究の総括として、早稲田大学商学同攻会より『周作人国際学術シンポジウム特集号』（『文化論集』第55号、2019年9月発行）を編纂刊行した。このなかにはシンポジウムでの発表論文だけではなく、「日韓現代中国文学ワークショップ」を通して研究交流を行っている梨花女子大学教授洪昔杓などからも寄稿を仰いだほか、2017年より閲覧整理してきた安藤更生旧蔵の周作人書簡や松枝茂夫旧蔵の周作人書簡の整理目録も収録したもので、3年間の研究の集大成になった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計23件（うち査読付論文 8件 / うち国際共著 2件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 小川利康	4. 巻 4期
2. 論文標題 日本新村对周作人之影響再議 紀念俄羅斯十月革命百周年	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 中国現代文学研究叢刊	6. 最初と最後の頁 134-150
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.16287/j.cnki.cn11-2589/i.2018.04.009	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 小川利康	4. 巻 55
2. 論文標題 探尋『夢之世界』 周作人接触文化人類学的契機	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 文化論集	6. 最初と最後の頁 365 - 377
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 小川利康	4. 巻 1
2. 論文標題 周氏兄弟与進化論 “新村主義” 的思想種子	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『周氏兄弟与文学革命』論文集	6. 最初と最後の頁 44 - 56
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 小川利康	4. 巻 102
2. 論文標題 周作人と大逆事件 永井荷風との邂逅をめぐって	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 野草	6. 最初と最後の頁 19-42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 長堀祐造	4. 巻 12
2. 論文標題 周作人と宮本百合子 『魯迅全集』注の誤りに触れて	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『中国研究』（慶應義塾大学）	6. 最初と最後の頁 119-152
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 長堀祐造	4. 巻 76
2. 論文標題 中国における文学と革命 魯迅・陳独秀とトロツキー及び中国トロツキー派	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 社会主義理論学会会報	6. 最初と最後の頁 10 - 13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小川利康	4. 巻 3
2. 論文標題 周氏兄弟与大逆事件	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 社会科学輯刊	6. 最初と最後の頁 161-168
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 小川利康	4. 巻 0
2. 論文標題 貫串文白的理念	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 「認知新維度：語言認知、翻訳与美学」国際研究会論文集	6. 最初と最後の頁 1-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 小川利康	4. 巻 0
2. 論文標題 小詩運動の周辺 周作人と謝冰心	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 九州大学国際シンポジウム「『春水』手稿と日中の文学交流 周作人、冰心、濱一衛」論文集	6. 最初と最後の頁 23-31
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小川利康	4. 巻 0
2. 論文標題 文白の間 小詩運動を手がかりに	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『稲畑耕一郎教授退休記念論文集：中国古籍文化研究』下巻	6. 最初と最後の頁 323-335
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 長堀祐造	4. 巻 0
2. 論文標題 陳独秀早稲田留学についての一考察	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『稲畑耕一郎教授退休記念論文集：中国古籍文化研究』下巻	6. 最初と最後の頁 309-322
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 長堀祐造	4. 巻 11
2. 論文標題 陳独秀「復党」・協力問題と「トロツキー派に答える手紙」	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 慶應義塾大学日吉紀要 中国研究	6. 最初と最後の頁 1-13
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 長堀祐造	4. 巻 112
2. 論文標題 魯迅の文芸観と運動としての文学、そして宣伝	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 慶應義塾大学 藝文研究	6. 最初と最後の頁 132-138
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 長堀祐造著、表亮訳	4. 巻 55
2. 論文標題 周作人與宮本百合子 従《魯迅全集》注釋之誤説開去	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 文化論集	6. 最初と最後の頁 571-596
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 長堀祐造	4. 巻 417-418
2. 論文標題 書評：吉留昭弘著『陳独秀と中国革命史の再検討』刊行に思う	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 反戦情報	6. 最初と最後の頁 18-19
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 長堀祐造	4. 巻 2月25日
2. 論文標題 阿壠著、関根謙訳『南京 抵抗と尊厳』「抗日前線司令官が描く南京陥落の実相ÔÔ」 「胡風派分子」阿壠の傑作、執念の全訳なる	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 東方	6. 最初と最後の頁 22-26
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 長堀祐造	4. 巻 13
2. 論文標題 瞿秋白「多余的話」異聞 「豆腐」の謎を解く一試論	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 慶應義塾大学日吉紀要・中国研究	6. 最初と最後の頁 159-220
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小川利康	4. 巻 0
2. 論文標題 剖析《人的文學》的思想骨格 葛理斯與新村主義的影響	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 百年回顧: 文化与文学国際學術研討會論文集 (人民大学)	6. 最初と最後の頁 104-117
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小川利康	4. 巻 0
2. 論文標題 周作人与大杉栄 甘粕事件前後為中心	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 魯迅与五四新文化 紀念五四運動一百周年国際學術研討會論文集 (湖南大学)	6. 最初と最後の頁 356-378
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 飯倉照平、小川利康	4. 巻 55
2. 論文標題 早稲田大学會津八一記念博物館所蔵『松枝茂夫旧蔵書簡』解題	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 文化論集	6. 最初と最後の頁 223-231
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 徳泉さち、小川利康	4. 巻 55
2. 論文標題 早稲田大学會津八一記念博物館所蔵『松枝茂夫旧蔵書簡』目録	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 文化論集	6. 最初と最後の頁 233-243
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小川利康	4. 巻 56
2. 論文標題 周作人與小品文 對“亡國之音”的反駁	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 文化論集	6. 最初と最後の頁 39-54
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小川利康	4. 巻 1
2. 論文標題 周氏兄弟とボードレール	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 アジア評論	6. 最初と最後の頁 27-34
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計11件（うち招待講演 7件 / うち国際学会 4件）

1. 発表者名 小川利康
2. 発表標題 ”進化論”与”互助論”之糾葛 周氏兄弟的進化論比較
3. 学会等名 『魯迅与中国現代民族文芸復興思潮國際學術研討会』論文集（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 長堀祐造
2. 発表標題 中国における文学と革命 魯迅・陳独秀とトロツキー及び中国トロツキー派
3. 学会等名 社会主義理論学会 第79回研究会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 長堀祐造
2. 発表標題 陳独秀の生涯 日本留学期を中心に
3. 学会等名 中国人留学生史研究会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 長堀祐造
2. 発表標題 漱石と魯迅 - 油絵「魯迅遺容」作者の日本人画家
3. 学会等名 シンポジウム「漱石と魯迅、百年の“対話”（招待講演）（国際学会）」
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 長堀祐造
2. 発表標題 『陳独秀文集』全三巻翻訳で見えてきたこと及びその他 陳独秀早稲田留学問題にふれて
3. 学会等名 早稲田大学中文学会第四十二回春季大会（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 小川利康、趙京華、董炳月
2. 発表標題 大歴史1920年代, 十字街頭の周作人
3. 学会等名 東方歴史沙龍・清華東亞文化講座『東方歴史評論』、魯迅博物館（魯迅書店）2019年6月27日、招待講演、國際学会）（招待講演）（國際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 長堀祐造
2. 発表標題 『陳独秀文集』の編訳に携わって
3. 学会等名 「民国史論の会」主催「シンポジウム 民国史の中の陳独秀」、東京・六本木國際文化会館2017年9月30日（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 長堀祐造
2. 発表標題 陳独秀的「恢復党籍問題与『答託洛斯基派的信』
3. 学会等名 第十二屆東亞學者現代中文文學國際學術研討會「文學革命的百年 傳統、暗流及特異點 現代東亞文化的光譜」名古屋大學大学院人文学研究科、2017年10月28日、招待講演（國際学会）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 長堀祐造
2. 発表標題 王凡西の永続革命論と陳独秀の民主思想
3. 学会等名 シンポジウム「世界を揺るがした一〇〇年間 - 世界史から見たロシア革命」、亀戸文化会館2017年11月4日。招待講演（コメント）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 長堀祐造
2. 発表標題 研究会報告（書評）山口守著『巴金とアナキズム』
3. 学会等名 東京現代中国文学研究会、2019年6月22日
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 長堀祐造
2. 発表標題 魯迅とトロツキー 文学と革命
3. 学会等名 慶應義塾大学三田オープンカレッジ「慶應義塾の現代中国研究」、2019年6月29日（招待講演）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 小川利康	4. 発行年 2019年
2. 出版社 平凡社	5. 総ページ数 404
3. 書名 叛徒と隠士 周作人の1920年代	

1. 著者名 長堀祐造	4. 発行年 2017年
2. 出版社 平凡社	5. 総ページ数 496
3. 書名 『陳独秀文集』 「政治論集2」（共編訳）東洋文庫811	

〔産業財産権〕

〔その他〕

周作人国際学術シンポジウム
<http://zhouzuoren.ogawat.net/>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	長堀 祐造 (NAGAHORI Yuzo) (40208046)	慶應義塾大学・経済学部(日吉)・教授 (32612)	